〔東京家政大学研究紀要　第40集　(1), p.127～133, 2000〕

小学校学級経営の現状と展望

福田　啓子

（平成11年9月30日受理）

Class Management of Elementary School, Today and the Future

Keiko FUKUDA

(Received on September 30, 1999)

I　はじめに

今日，小学校学級経営におけるひとつの病理現象として，児童の問題行動が大きくクローズアップされ，その，原因分析，方策について論議されているのは周知の通りである．

学級（クラス）は本来，単なる学習の場ではなく，社会性や集団資質を育成し，社会集団への方向付けをしていくという学校教育の重要な位置を占めている．そして，この学級を運営していくのが学級担任であり，果たすべき役割は実に大きいものである．

しかしながら，社会の急激な変化は，子どもの生活にも様々な影響を及ぼしている．多種多様な情報や刺激の中で，時間的なゆとりの減少，友人との相互関係の希薄化が生じ，個々の抱えるストレスを増大させている．また，教師や親（大人）が要求する価値観と子どもが求める価値観の間にズレが生じ，その結果，授業への不満，学級活動に対しての無気力，学習や授業の拒否，担任への反抗といった現象が起こり，授業指導や生活指導が困難になっているのではないだろうか．さらに教師にとっても，授業指導の内容や技術の質を図る以前に，こどもへの接し方や関係の持ち方が問われてくるだろう．

従来の子ども観や指導観の転換が迫られ，学校，学級体制の見直しが必要となる．友人同士や教師との交流や相互の共感，理解が図られるような学校教育の実践が求められる．そして，そういった意味においても〝新しい学級づくり〟は緊急な課題となるのである．

そこで，今回は，現在の学校教育の現状を児童・教師の実態および教育改革の施策状況を把握することによって明確にし，加えて，実際の学級（クラス）の中で子どもたちはどのような意識をもち，どのような行動がみられるのかということを調査することによって，今後の学級経営の在り方や対策について考えていきたい．

児童学科　初等教育第3研究室

II　学校教育の状況

1．児童の実態

東京都教育庁は，都内の公立小学校における児童の学級での問題行動を調査し，「子どもたちの規範意識が低下し，小学校の学級経営は困難に直面している」と指摘

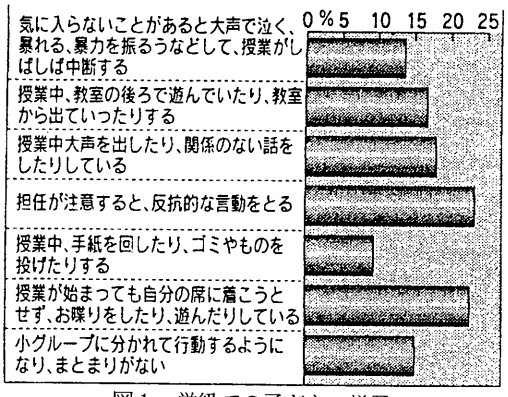

図1　学級での子どもの様子
（日本経済新聞　1999，7月15日版）

している．図1の調査結果をみると，「授業が始まっても自分の席に着こうとせず，おしゃべりしたり遊んだりしている（22.5％）」，「担任が注意すると，反抗的な言動をとる（23.2％）」などがあげられている．そして，「問題の解決のために何らかの対応をとった学級がある」とした学校は44.1％を占め，その内容は「複数の教員で指導したり，補助を付ける必要があった（17.5％）」，「保護者の協力を得なければならなくなった（14.7）」となっている．

また，小学校における問題行動として，「授業中の立ち歩き」「授業中に物を投げる」「授業中無断で教室を出て行く」「話が聞けない」「授業とは違うことをしている」「いたずらをする」といったことも担任教師から多く聞かれる．さらに，「子どもの授業や生活指導上のことで学級経営が困難に陥ったことがある」教師が66％となっていることも指摘されている．深刻に受け止めるべき現状である．

最近では，文部省が「学級経営をめぐる問題の現状とその対応」（中間まとめ）として，全国の小学校で発生している事例を公表し，分析・考察を示した．そこでは，「教師の学級経営が柔軟性を欠いている事例など，教師の指導力不足と考えられるものが七割あったが，残りの三割は，指導力がある教師でも困難だと思われるような学級だった」としている．

これらは，子どもを取り巻く生活環境が急激な変化に起因するところが大きい．物質的豊かさや便利さの影響を受けながら生活している一方，基本的生活技術を養う身体的体験，自然に関わる体験の減少，友人との交流や触れ合いの減少から，社会性の不足や人間関係の希薄化が生じている．子どもの社会化をめざした集団活動の充実や学級活動を中心とした学級経営の工夫が必要とされるだろう．

2　教師の実態

学校教育の大部分は，学級を単位として展開され，特に小学校教育の成果は，学級担任による学級経営の成否に関わるところが大きい．すなわち，教師の問題として捉えられることが多く，各方面でも教師の力量や資質が論考されているところである．しかしながら，今や教師にも異変が起きていることもまた深刻な事実である．

例えば，「子どもの発想や意欲を感じ取ることができない．受け入れられない」「学級内の問題に向き合わない」「問題解決をしようとしない」「学級経営に熱意を示さない」さらに「学習や授業に対しての目的意識が少ない」などの状況も多く聞かれるところである．ちなみに，文部省による「教師を対象とした調査」では，問題ある子どもたちの行動・言動は，教師にも反映され，心の病気で休職する割合が過去最高となっているという．そして，こうした状況は新任の教師のみならずベテラン教師にも多々みられるといわれる．子どもの状況とともに，担任教師の対応策を考えていかなくてはならないとの印象を受けるものである．

先に述べたように，授業内容や技術指導は，従来と異なり，子どもへの接し方や関係の持ち方も変革がなされなければならない．子どもは，教師の展開される授業の中で教師自身の人間性を敏感に感じ取るものである．子どもたちに対して，適切な指導，すなわち子どもたちとの人間関係がうまくできなかった場合，「信用できない」「味方ではない」「反抗する」といった，教師への不信感が学級全体に広がってしまうのである．そのような状況に抗して，子どもの思いを聞き入れること，怒りや疑問，不満に共感し受け止めていくことが先決であろう．

また，子どもたちのまわりは，多種多様な情報・刺激があり，学校や教師の諸価値観との間にズレが生じている．相互の共感・理解が実践に求められるだろう．子どもを理解する機会や学級経営の工夫をしていく意欲や姿勢が望まれる．

3　教育改革諸施策の状況

中央教育審議会（1996年７月）では，子どもの資質能力として，「生きる力」を提唱し，学校教育のあり方や考え方の大転換を促した．これは，子どもの直接の学習や生活の場である学級（クラス）のあり方を見直すものでもあり，「個性の尊重」「能力・適性に応じた教育」「教育制度の柔軟性」などを配慮した授業の展開が求められるようになった．

教育職員養成審議会（1997年７月）では，「教育実践の場が抱える問題に対応できる実践的能力を身につけるために，知識・理解よりも子どもとの触れ合いの仕方や教え方を重視する能力」が強調され，翌年（1998年３月），中央教育審議会は「こころの教育」のあり方を唱え，「新しい時代を磨く心を育てるために」を提出した．そこでは，「家庭のあり方を見直す」「地域社会の力を生かす」ことと同時に「心を育てる場としての学校の役割」が強調され，教師に関しては，「子どもたちに信頼され，心を育てることのできる先生」の養成が打ち出されている．そして，「教員養成カリキュラムの内容」は，教え方の指導や子どもとの触れ合いを重視する観点からの改善・充実を進めていくことを必要とし，「教員採用にあたっての重視すべき内容」では，強い使命感を持ち，豊かな人間性を備えた指導力のある人材の確保を重視している．さらに，現在の子どもの状況に対応すべき「現職研修のシステム改善」などが述べられている．

また，教育課程審議会最終答申（1998年７月）では，「授業時間の大幅な減少」とともに，「総合的な学習の時

間」が創設され，思考力や判断力，表現力を子どもに身につけさせる事を意図している．特に「教育課程基準の改善（関連事項　5教師）では，これからの教師に実践的指導力を付けることの重要性を強調し，教員養成，採用，研修の一層の充実について提言している．

そして，新しい学校の方向と具体的な内容が提示された新学習指導要領が告知（1998年12月）され，「特色ある学校づくり」「総合的な学習の実施」「豊かな人間性」と「その子のよさの育成」「基礎・基本の定着」「開かれた学級づくり」が打ち出された．特に注目されるのは，学校づくりの在り方についての新しい方向の提示であり，創意工夫を生かした特色ある教育活動が求められるようになった．さらに学校教育の抱える多くの問題解決のために，家庭や地域と一体となった開かれた新しい学校づくりを方向付けている．

このように，近々公布された調査や答申，学習指導要領の内容が示唆しているように，学校教育は，早急にこれらの問題の解決を迫られ，在り方自体の変革が求められているのである．

Ⅲ　児童の意識調査

子どもたちにとって，学級（クラス）は学習の場であると同時に生活の場でもある．そもそも子どもたちは，この場をどう捉えているのであろうか．ここでは，学級に対しての意識や行動を調査し，その結果について検討する．

1　方　法

・対象　都内5校の第4学年（男子67名，女子69名）

・期間　平成11年7月

・以下の質問項目を設定し，それぞれ内容別に分類，評定を行った．

①　友人に関する事項

「クラスには，どのような友だちがいますか」

「友だちとどのようなことをしますか」

②　学級の状況に関する事項

「クラスのすばらしいことはどのようなことですか」

「クラスの様子はどのようですか」

③　学級に対する意識に関する事項

「学校に来るのが楽しみですか」

「今のクラスになって良かったですか」

「今のクラスが好きですか」

④　学級でのタイプに関する事項

「自分をどんなタイプだと思っていますか」

2　結　果

図2，3は，「友人に関する事項」について，内容別に人数と割合を示したものである．図2の「自分のクラスにどのような友だちがいるか」ということをみると，「休み時間，いっしょに遊ぶ友だち」が，「たくさんいる」（56.6％），（わりといる」（30.9％）となり，次に「すきな友だち」となっている．また，「よくないことをしたとき，注意してくれる」，「うゝしいことがあったとき，いっしょに喜んでくれる「，」こまっているとき相談にのってくれる」友人は「わりといる」「2，3人はいる」が多くなり，「今のところいない」もわずかながらも増えていることがわかる．

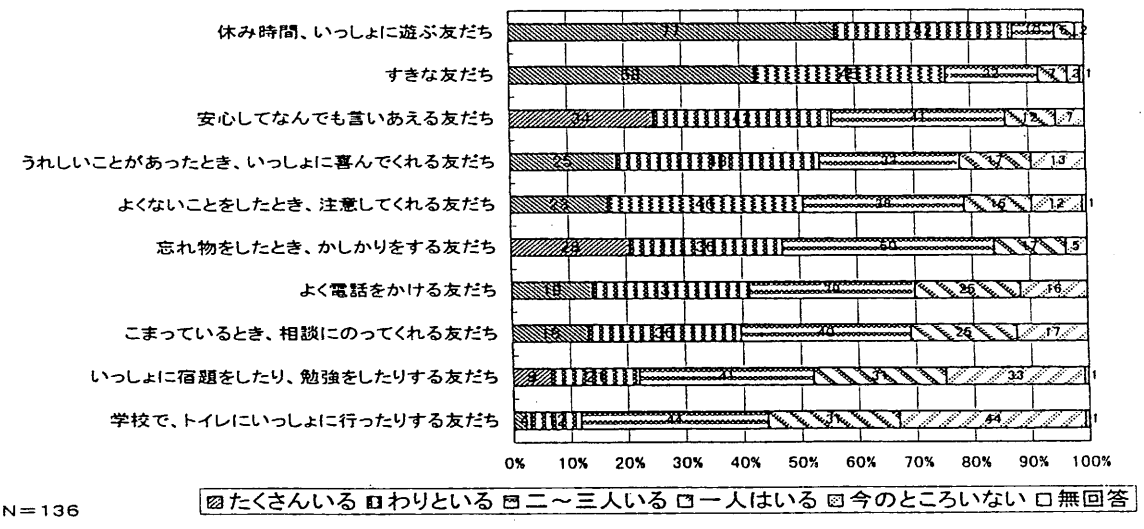

図2　友人に関する事項 (1)

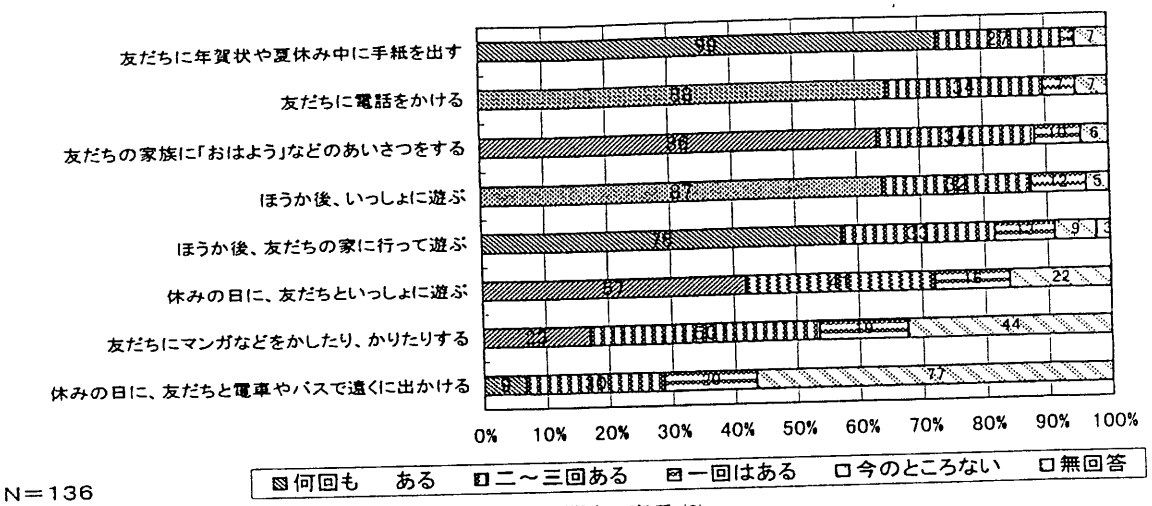

図3　友人に関する事項 (2)

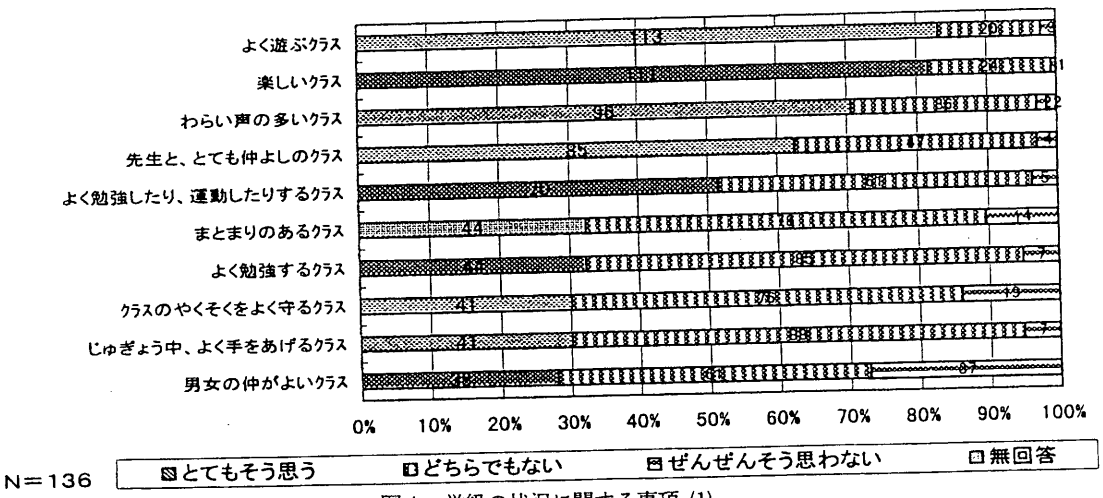

図4　学級の状況に関する事項 (1)

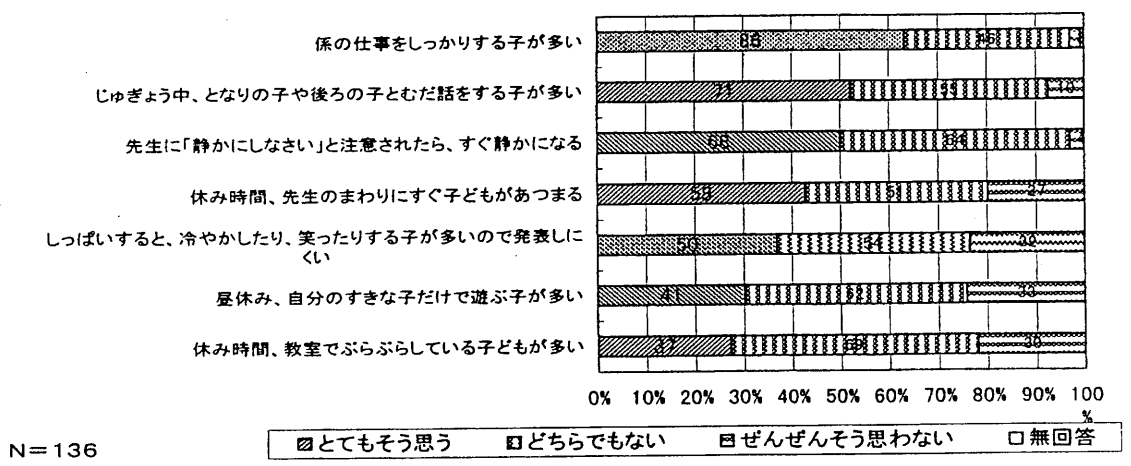

図5　学級の状況に関する事項 (2)

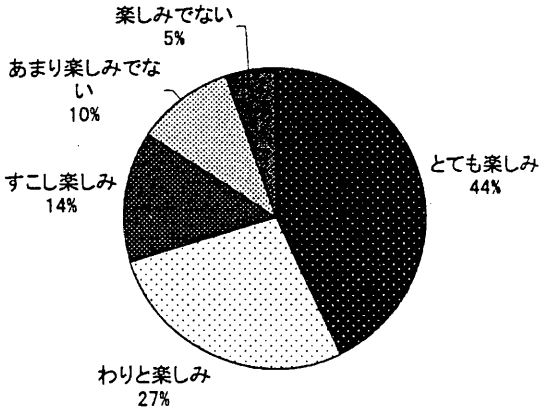

図6　学校に対する意識

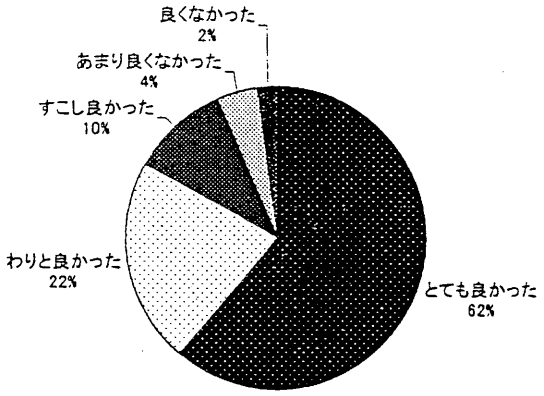

図7　学級に関する意識

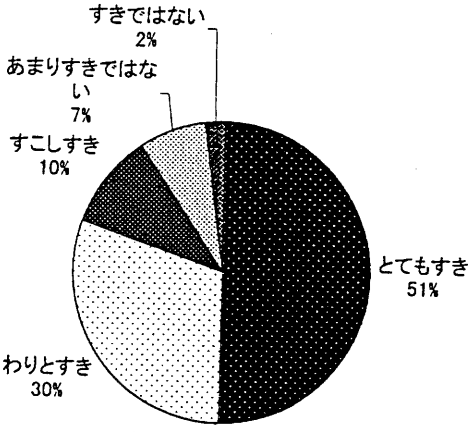

図8　学級に対する意識

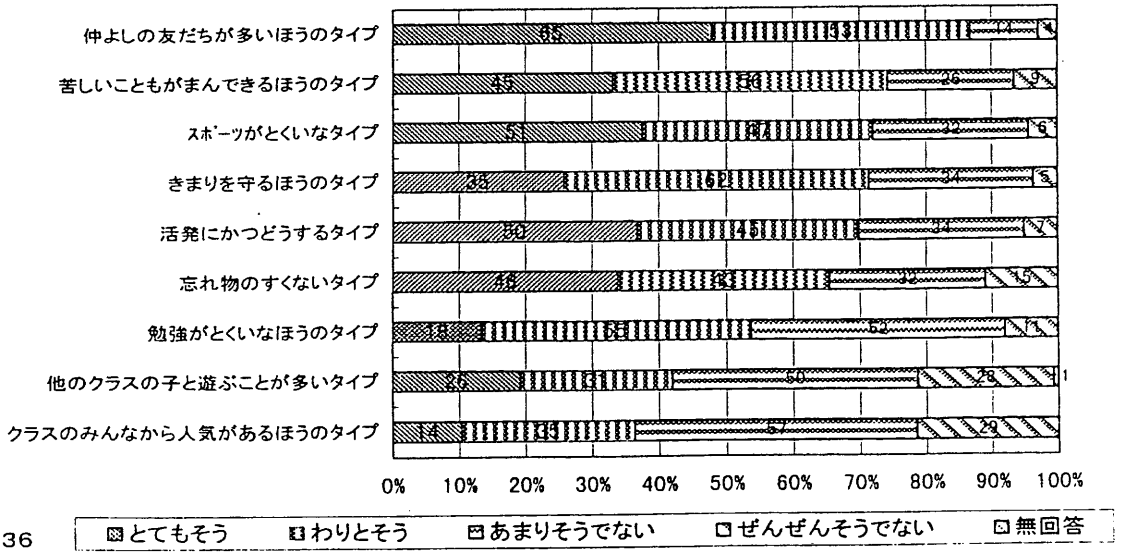

図9　学級とタイプに関する事項

図3は，友人との行動に関して示したものであるが，「手紙を出し合う」「電話をかける」「あいさつをする」「いっしょに遊ぶ」といった行動が「何回もある」と答えたのが半数以上であった．対して，「友だちと本などの貸し借り」は，「今のところない」(32.4％)が比較的多くみられる．

次に，学級の状況に関する事項をみると，図4の「自分の学級のすばらしいこと」では，「よく遊ぶ」「楽しい」「笑い声が多い」「先生と仲良し」なクラスだと感じているのが大部分が「とてもそう思う」はそれぞれ83.1％．86.6％，70.6％と高い値を占めている．「まとまりのある」「よく勉強する」「授業中よく手をあげる」「クラスの約束を守る」などは，「どちらでもない」と答えているのが半数以上となっている．「男女仲がいい」では，「全然そう思わない」が27.2％と比較的多くなっている．

図5の，「学級の様子」では，「係りの仕事をする子が多い」ことをは半数以上の子どもが「とてもそう思う」(63.2％)と答えている．また，「授業中となりの子や後ろの子とむだ話をする子が多い」(51.2％)ことをと感じている子どもも多いが同時に「先生に静かにしなさいと注意されたらすぐ静かになる」(50.0％)「休み時間に先生のまわりにすぐ子どもが集まる」(42.6％)といったこともわかる．

図6・7・8は，自分の学級に対する意識を示したものである．まず，学校に来ることが，「とても楽しい」58％，「わりと楽しい」37％，「すこし楽しみ」19％，「あまり楽しみでない」14％，「楽しみでない」7％である．図7では「今のクラスになってよかったか」ということに対しては，「とても良かった」83％，「わりと良かった」30％，「すこし良かった」14％，「あまり良くなかった」6％、「良くなかった」3％となっている．「今のクラスが好きか」ということに対しては，「とても好き」68％，「わりと好き」41％，「すこし好き」14％，「あまり好きでない」10％，「好きではない」3％となっている．学級に対する意識では，ほとんどの子どもが学校を楽しいところであると感じ，クラスに対してもほぼ満足し，好感をもっていることがわかる．特に女子に多くみられるのも特徴である．

図9は，「クラスの自分のタイプ」を示したものである．「仲良しの友だちが多いほう」「スポーツが得意」「活発に活動する」タイプと捉えている子どもが多く，「他のクラスの子と遊ぶことが多い」「勉強ができる」「人気があるほう」などは少ない．これらは，それぞれのタイプの子どもが，学級，友だち，教師に対してどのような意識をもっているのか追求することによって，学級経営の新たな手がかりとなることが予測され，興味深い結果であった．

全体的にみると，学校生活の中で遊びや交流を楽しいものと捉えている．本来，子どもは，友だちと仲良く楽しくすごそうとする集団的存在であり，人間性や連帯感が養われていく．また，教師との関係についても，「先生と遊んだり，話たりすること「を求めていることもうかがわれる．

小学校（子ども）にとって，学級担任は，絶対的存在である．子どもの生活が変わろうとも学級担任との関係が極めて大切であり，不変の課題であるといえるだろう．これらの期待に応え，経営の工夫をしていく必要があるだろう．

Ⅳ　まとめ

以上，児童の実態，教師の実態，教育施策および児童の意識調査から，小学校の学級経営の状況について述べてきた．

価値観が多様化した今日，子どもたちにとっても目標やモデルが描けないまま，過ごしていることが多く，学校・学級の中で問題行動の事例が増えているのも事実である．これらの把握と対処は，子どもたちの人間関係づくりをめざした学級経営の実践への手がかりとなるものだと思われる．

学級では，教師の直接的な指導によって，子どもたちは，活動しているのであり，教師の影響を受けるのは当然のことである．学級の様々な問題現象を引き起こしている原因が，子ども自身の変化ばかりではなく，教師の能力，人格，適性，指導力，人間性にあるともいえるだろう．授業の力量を高めるとともに，積極的に取り組む姿勢が大切である．

基本的には，教師，担任の考えていかねばならない問題であるが，学校全体として対処していく課題でもある．

児童の意識調査では，クラスの状況や友人関係においては，大きな問題は見られなかったが，その中で，わずかではあるが，集団になじめない子や友人と遊べない子ども，クラスに対して批判的な子どもが存在しているということを無視してはいけない．「ひとりひとりのこどもに」を考えたクラスづくりが，いっそう求められてい

ることを示唆している.

子どもたちにとって，学級（クラス）は，楽しく，明るく，安心感のある場所である.

子どもの意識，行動の変質を理解するだけでは解決できることではない．学級経営の方式も改革されていかなくてはならない．幸いなことに，中教審においても，従来の学級組織にとらわれない運営の答申や複数担任制などの準備にかかっている.

教育課程の改定では，児童の実態に応じて，創意工夫を生かした「特色ある学級」，地域社会や家庭との連携を図った「開かれた学級」の推進が求められている.

今後，新学習指導要領の施行に伴い，それぞれの小学校で，子どもの主体性や個性を重視した学級をどう経営していくか，人間性豊かな，活気ある学級づくりをどう実践していくかが，新たな学級経営の課題である.

参考文献

1）文部省「教育職員にかかる懲戒処分等の状況について」教育委員会月報　1997年10月号
2）中央教育審議会　第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」文部広報 1996年
3）中央教育審議会　第二次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」文部広報 1997年
4）教育職員養成審議会「新たな時代に向けた教員養成の方策について」 1997年
5）教育課程審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校，盲学校，聾学校及び養護学校の教育課程基準の改善について」 文部広報　1998年
6）内外教育
7）小学校学習指導要領
8）秋葉英則・他「学級崩壊からの脱却－教師412人の実態調査」，フォーラムA　1998年